

---

# 本の虫～10月の図書館～

\*姫林檎\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本の虫～10月の図書館～

### 【Zコード】

N7138C

### 【作者名】

\*姫林檎\*

### 【あらすじ】

野球部にマネージャーとして入部した私。秋になり野球部は練習試合におわれる。そんな中『次の練習試合に勝つたら近藤君に告白しよう!』と決めた私は・・・本の虫シリーズの10月です。

立ち込める砂埃

バットとボールの当たる音

その中で私は一生懸命応援していた。

10月 野球部は練習試合におわれていた。

土田は必ず試合があるし、平田の部活もみんな真剣。

夏の甲子園をかけた試合で惨敗したみんなは先輩もいなくなり、かなりやる気になっていた。

「次！－近藤行けよ！」

顧問の先生の声が聞こえた。

私は思わず顔をあげて近藤君のほうを見た。

近藤君は私と目が合いつとにつりと笑った。

緊張なんて全然なさそうな笑顔。

でも、緊張してないわけがない。

「－、近藤君・・・」

近藤君が私の横で立ち止まつた時、私は近藤君を見上げた。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。」

「で、でも・・・」

「夏の時は別として、今の俺等が負けるわけないじゃん

「なんでそんなこと・・・」

「だつて、秋から勝利の女神が入部してくれたからね。」

近藤君はそう言つてまた笑うと私の頭に手を置いて、応援席を飛び出した。

私はぎゅっと右手を左手で強く握り締めた。

近藤君がバットをかまえる。

「打て！――！」

大きな声で怒鳴ると、隣にいた同級生が驚いて座つてしまつた。

カキンッ！

気持ちのいい音が響いて、ボールは空へ向かつて綺麗に飛び上がつ

た。

その試合は快勝。

近藤君はものすごい、『機嫌な笑顔』だった。

「勝利の女神の応援のおかげだね」

なんて私に言った。

次の試合も近藤君が打って、もしも試合に今日みたいに勝つたら。

もしも試合に勝つたら

告白しよう

近藤君に好きですって 言おひーーー！

そう決めていて、田曜日の試合は昨日よりも緊張した。

その日も近藤君は試合に出た。

だけど 勝てなかつた。

勢によく飛び上がったボールは急降下し、すっぽりとグローブの中におさまってしまったのだった。

「よーし……打ち上げだー！」

2年生の先輩の中でもマードメイカーの先輩がさよると涙声で言った。

野球部では毎年恒例らしく、秋の練習試合で負けた後は『打ち上げ会』とか言って部室で騒ぐらしい。

部室でみんながそれぞれ持参してきたジュースやらお菓子やらを広げてわいわい騒ぐ。

私はそんな中隅っこでちまちまジュースを飲んでいた。

告白できなかつた、と安心した気持ちと残念な気持ちとが混ざり合つていた。

「勝利の女神がそんなところで何やつてんの？」

ジューースを片手に、近藤君が私のそばに来た。

「……勝利の女神なんかじゃないじゃん。負けちやつたじゃん。」

「あははっ俺がへましたからねー！」

近藤君はそういうと私の横に座つた。

「ま、次は俺等の代だからや。来年甲子園に連れてつてあげるよ。」

「うつわ・・・やうじゅう」と言つていいの?」

「うん 言つだけはタダ。」

近藤君はそう言つてにっこりと笑つた。

私もくすくすと笑つてジュースを飲んだ。

開始から1時間後、なぜかリタイヤの人気が続出していた。

「なんでみんな倒れてるの・・・?」

部室の床にみんなが倒れていた。

残つていたのは私と近藤君だけだった。

「あ、お酒」

先輩の1人が持つていた空き缶を近藤君が拾い上げる。

それはテレビのCMでも見る缶チューハイだった。

私と近藤君は大きくため息をついて、毛布やジャージをかぶせてまわつた。

全員にかけ終わると、なんだかおかしくて2人して笑つてしまつた。

「これ、先生にバレたらどうなるんですか?」

「えー？ 部活できなくなつちやつねーきつヒーー。」

けらけら笑つた後、なんとなく沈黙した。

みんな寝てるんだから静かになるのは当たり前なんだけど。

「・・・帰らつか」

近藤君はそつこいつと自分の荷物と私の荷物を持って部室を出た。

「送るよ。家つてどの辺？」

「あ、えつと・・・町薬局つて知つてます？そこの前なんですか  
ど・・・」

「ああ、あの辺りね」

近藤君は私に荷物を渡すと歩き出す。

外は真つ暗で、人通りは全然なかつた。

告白一なんて考えてたからなんだか恥ずかしくて、私は近藤君の少し後ろを歩いてた。

話題が見つけられず、黙つていた。

近藤君も喋らない。

だけど、不意に近藤君が口を開いた。

「俺さ、正直・・・今回の試合勝てるって思ってたんだ」

「え？」

「去年、先輩達が快勝してる学校で・・・今年もたいしたことないって評判でさ。でも・・・負けた」

私はなんていえばいいのかわからず、うつむいた。

近藤君は苦笑して私の方を振り向いた。

「ま、公式戦では絶対に勝つよ。」

「・・・うん」

心臓がドクン、と鳴った。

急に心臓が重たくなった。

今、気がついた。

2人きり 夜道 誰もいない

これは、絶好の告白の・・・！？

そんなことを考えると心臓がドクンドクンとうるさい、なんだか

自分の息が荒い気がした。

ふと、近藤君が振り向いた。

「俺さ、賭けてたんだ。」

「え？」

「今回の試合に勝つたら・・・何々しようと思つてたんだ。」

私と同じだ！

近藤君はなんて・・・賭けてたんだろ？

「な、何しようと思つてたの？」

「んー・・・内緒」

「えー？」

「だつて書つの恥ずかしいし」

近藤君はそう言って笑った。

恥ずかしい 賭け事・・・

私の場合は告白だ。

でも 近藤君が告白だとしたら・・・誰に？

私！？なんて一瞬期待してしまった後、近藤君の本の女の子が浮かんだ。

『だけど、今でも俺にとつては大事な人だよ。』

近藤君はその人を『大事な人』と言つた。

好き、つてこと？

急に、あの言葉を聞いた時のどきどきとした感情を思い出した。

同時に、胸が凄く苦しくなつた。

泣くな

泣くな

暗いとはいえ、近藤君に 気づかれる

今 笑つて嘘を言える自信はない

私は、薄暗い中で見える近藤君のぼやけた後姿を見た。

近藤君のことが大好き。

でも、今は黙つてしまつ。

神様

どうか どうか近藤君の恋が碎け散つてしまつりますよつて

その後で私を見てくれるとは限らないけど

だけど

どうか 神様

こんなことを願つてはいけないとはわかつていいけど

「・・・・」

「……」

空を見上げると、月と星が私達を見下ろしていた。

少しだけ肌寒い、冷たい風に吹かれてゆれる桜が凍えて震えてるよう見える一〇円の夜のことでした。

(後書き)

すいません、野球部のことはあまりよくわからないので『リアリティねえ!』とか思う人がいたかもしれませんね。そういう方は本当にすみませんでした。

これからもシリーズとして続けていくつもりなので長い目で見てやつてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7138c/>

---

本の虫～10月の図書館～

2010年10月11日00時51分発行